

律令国家の喪葬

— 豪族の喪葬権の行方 —

石井輝義

はじめに

律令国家が親王以下諸臣に至るまでの喪葬に規制を加えようとしたことは、その原則である律令の編目に「喪葬令」が存在することから明らかであると考ええる。喪葬令によって律令国家は、それ以前の喪葬にどのようにして関与し、掌握したのであるうか。そこで令制以前には、各喪葬集団によって独自に行なわれていたと考えることのできる喪葬に関し、令制導入によって国家はどのように関与し、掌握しようとしたかについて考えてみたい。

この問題を明らかにする分析視角としては、国家の喪葬への関与の原則を令規定によって確認し、令制以前の喪葬を行う権利と比較し、どのような権利が国家によって掌握されたかを検討することが有効であると考ええる。本稿では、

このような分析視角によって古代の喪葬、その中でも特に律令国家の成立期前後の喪葬について考えてみたい。

具体的には、まず第一に、律令国家が原則として規定した律令によって、どのようにして関与することを意図したかを確認してゆく。さらに必要なことは、律令国家以前の喪葬がどのように営まれていたかを確認することであると考ええる。したがって、以上の手順で考察を進めてみたいと思う。

一、権利と原則

まず始めに喪葬に関し、律令国家が親王以下の喪葬にどのように関与したかを検討してみたい。それに際し、あらかじめ古代の喪葬を執行する上で、不可欠と思われる要素

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

を確認しておきたい。その不可欠の要素とは、喪葬を営む上で欠かすことのできないと考えることができ、令制以前には、各喪葬集団に帰属していたと考えることができる、喪葬を営む上での権利ともいうべきものとして認め得るものである。

第一に、日程の決定権を掲げることができる。死から埋葬まで、更に、埋葬後の墓に対する儀礼など、様々な儀礼を行なう日程の決定を誰が行なうかは重要な問題であり、第一にあげるべき最も必要不可欠の権利とも言うべきものである。第二に、斎場の決定である。すなわち喪葬を営む場を何処にするかを決定すること、さらにはその場の日常的な管理を誰が行なうかなどの場の管理の問題も含め、斎場の決定に関する権利も重要な問題と考えることができる。第三として、喪葬時における食事の支給の問題をあげることができる。喪葬に際しての食事とは、喪葬に参加する人々への食事にとどまらず、死者への食事であるヨモツヘグイを含め、これらをだれが行なうかを示している。次に喪葬編成権も、不可欠の要素と考えることができる。この喪葬編成権とは、供奉する人間の序列や、埋葬の場への移動を行なうときの葬列における序列などを決定する権利を意味している。最後に、造墓に関する権利も掲げることができよう。墓の造営に関しては、場の問題や人員の問

題などさまざまなことを行なう権利をあげることができる。ここまでにあげた五つの内容は、喪葬を営むうえでは欠かすことのできない要素であり、それぞれがその決定に際して、権利とも言うべきものが伴うと考えることができ、令制以前にあっては、各喪葬集団に属していた権利と考えることができるものである。

次に律令国家の喪葬への関与について、その原則を『令集解』喪葬令の令本文、並びに法家の解釈によって確認してみたい。国家からの親王以下の喪葬への関与を考えると、国家から喪葬を行なっている場への接触を考えればよいであろう。つまり喪葬への関与を国家から親王以下への何らかの動きと捉えたと、『令集解』喪葬令において、国家から何らかの支給を受ける条文は、京官三位条・百官在職条・職事官条・官人從征条・親王一品条・皇親及五位以上条・親王条を掲げることができる。

これらの条文から、国家からの支給の内容は、「人」が派遣されるものと「物」の支給に大別することができると思われる。そこで「人」の派遣、「物」の支給に注目して整理を行なうと、以下のように、律令国家の喪葬関与に関する項目を掲げることができる。

A 「人」に関するもの 「遣弔使」、「監護喪事」、「土部」、

「遊部」、「送葬夫」。

B「物」に関するもの 「賻物」、「殯斂調度」、「葬送具」、

「氷」。

ここに示した「A『人』に関するもの」と「B『物』に関するもの」として確認することが出来る、養老喪葬令に基づく律令国家の喪葬関与の原則と、先に示した古代の喪葬に不可欠と考えることができる要素・権利を照らし合わせると、次の表(1)のようになる。

表 (1)

喪葬の権利	喪葬関与の原則
日程の決定	関与なし
斎場の決定	関与なし
喪葬時の食事の支給	関与なし
喪葬編成権	「葬送具」
造墓	「送葬夫」

表(1)での整理・比較から明らかになることとして、令制以前には各喪葬集団によって営まれていたと考えることができる喪葬に対し、律令国家が喪葬関与の原則として規定

史苑 (第五七卷 一号)

した令規定によって何らかの関与が行なえたと考えられることができるのは、「喪葬編成権」と「造墓」に関してであるということができると考える。したがって、表(1)での整理から、律令国家の規制は絶対的ではなかった、ということができのではないだろうか。つまり養老喪葬令にみえる律令国家の喪葬が、既存(豪族等)の喪葬にどのような影響与えたかを考えた場合、養老喪葬令の規定によっては、その喪葬を全面的には収公することはできなかったとの推測が成り立つと考える。

このことを一層明確にするために、ここで確認しておくなければならないのは、律令国家が喪葬に対してどのような認識を持ち、喪葬に関する何を掌握することによって、喪葬を収公することになるかということであると考える。この点を明らかにするために、律令国家の喪葬への関与・介入に関し、従来あまり注目されることのなかった、喪葬の「喪」と「葬」の意味の相違に注目しながら、律令国家の原則の中にみえる喪葬における時間的な段階について、節を改めて検討してみたい。

二、喪葬における「喪」と「葬」

喪葬の「喪」と「葬」の意味の相違を考えるうえで、重

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

要であると考えることが出来る条文は『令集解』職員令諸陵司条、『令集解』喪葬令首書の二箇条であると考ええる。

『令集解』職員令諸陵司条では、その長官である「正」の職掌としてみえる「喪葬。凶礼。」という本文に対する法家の解釈の中に、「喪」と「葬」の意味の相違を考慮するうえで、重要な記載を見ることができると考える。その部分を史料①としてあげると、次のようになる。

史料①『令集解』職員令諸陵司条

釈云。喪謂_レ在家起_二哀也。葬謂_レ送_二葬之_一也。喪葬之礼謂_二之凶礼_一。朱云。喪葬凶礼者。未_レ知。此文只為_二一人_一歟。若為_二臣下_一歟何。私案。依_二喪葬令_一。皆可_レ知_二臣下喪葬_一何。

さらに、『令集解』喪葬令首書では、喪葬令の編目の名称としてあげられている「喪葬」に対する法家の解釈として、次に史料②としてあげるように記載されている。

史料②『令集解』喪葬令首書

謂。喪者。死屍稱也。葬者。藏也。釈云。死謂_レ喪。音息郎反。藏謂_二之葬_一。音即盍反。跡云。死謂_二之喪_一。藏謂_二之葬_一。言_二死事葬事_一令耳。

ここにあげた史料①・②にみえる法家の解釈から、「喪」と「葬」の違いに注目し、整理すると次の表(2)のようになる。

表 (2)

	法家	「喪」	「葬」	備考
諸陵司	令釈	「謂在家起哀」	「謂送葬之」	喪葬之礼謂之凶礼
喪葬令	義解	「死屍稱也」	「藏也」	
首書	令釈	「死謂喪」 (音息郎反)	「藏謂之葬」 (音即盍反)	
	跡説	「死謂之喪」	「藏謂之葬」	言死事葬事令耳

以上のように史料①・②の「喪」と「葬」の意味の違いに注目して整理した表(1)から(3)によって、その意味の違いについて、次のことを指摘することができると考える。第一に法家の解釈によって、「喪」と「葬」は異なった意味を持つことが明らかである、と考えることができることである。二点目として史料①職員令諸陵司条に記載がみえる令釈から、「喪」と「葬」にはそれぞれに二つの動きが含まれることである。さらに史料②喪葬令首書の解釈から、喪葬の手順は死の後に「喪」から始まり、「葬」が行なわれることがわかることが明らかになることである。

このように、「喪」と「葬」の意味の違いは、喪葬の時間的な段階、すなわち喪葬の手順の相違に起因していると考えることができると思われる。したがって、律令国家は喪葬について、「喪」の段階と「葬」の段階という二つの段階が存在し、その二つの段階について十分な認識を持っていたことが明らかにできると考える。

喪葬における時間的な段階を律令国家がどのように認識していたかをさらに明確にするためには、その原則にみえる、喪葬における時間的な段階、手順における段階を表わす言葉を抽出することが必要であると考ええる。また、「喪」と「葬」の意味の違いが喪葬の時間的な段階、すなわち喪葬の手順の相違に起因していることから、前節で確認した

令制以前には既存の各喪葬集団が所有していたと考えることができる権利のうち、「日程の決定権」に密接な関係があると考ええる。したがって、この検討を行なうことによって、前節において律令国家が喪葬の日程の決定に関与することができなかったと推測したことを明確に確認することができると考える。そこで『令集解』を用い、養老令の本文や法家の解釈によって、喪葬の手順としてどのような段階が認識されているかを確認し、そのうえで「日程の決定権」について考えてみたい。

『令集解』において、喪葬に関する時間的な段階について記述がある条文は、先にあげた史料①職員令諸陵司条・史料②喪葬令首書と假寧令改葬条、假寧令給喪葬条、假寧令給喪假条、喪葬令服錫紵条、喪葬令京官三位条、喪葬令百官在職条、喪葬令親王一品条の九箇条文を掲げることができる。これら九箇条文の本文や法家の解釈から、喪葬における時間的な段階として、「死日（死之日）」、「発喪（「葬日」、「改葬」の用語を抽出することが出来ると考える。この喪葬における時間的な段階に注目し、史料①以下の九箇条文を整理すると、本稿末に掲げた表(4)のようになる。

この表(4)から「死日（死之日）」、「発喪」、「葬日」、「改葬」を時間的な段階として令の本文や法家が認識していた上に記されていることが明らかであり、そこに記された死

亡してから埋葬に至るまでの喪葬の段階、すなわち喪葬の時間的な段階を簡略化し、図式化すると、次のようになる。

死日（死之日）↓発喪↓葬日↓改葬

このように、「死日（死之日）」以下、「発喪」「葬日」「改葬」の順に喪葬が行なわれるという認識のもとに法家の解釈が記されていることが確認できると考える。死亡したことに関連する「死日（死之日）」は別として、「喪」に関する「発喪」「葬」に関する「葬日」、のちに「葬」を行なう「改葬」というように、喪葬をこのような段階に基づいて記していることから、表(4)にあげた史料①・②以下の九箇条の本文や法家の解釈が「喪」の段階と、「葬」の段階を明確に認識し、区分した上に記されていることが明らかにになると考える。「死日（死之日）」は別として、「発喪」「葬日」「改葬」について注目してみると、喪葬令百官在職条の「朱説」には、「當司分番會喪」が、「発喪」以降であるとの記述がみえる。また他の条文でも、「発喪」に関する法家の解釈が多くみられ、このことから、喪葬の段階において「発喪」が重要な意味を持つことは明らかであると思われる。

このように表(4)によって「死日（死之日）」以下、「発喪」

史苑（第五七巻一号）

「葬日」「改葬」の順に喪葬が行なわれるという認識が存在することを確認することができたと考え、このことが喪葬の時間的な段階や、喪葬を執行する上での手順ともいえる段階に基づいて記されていると考えることができることから、令制以前には既存の各喪葬集団が所有していたと考えることができる権利のうち、「日程の決定権」に密接な関係があると考ええる。そこで注目すべきなのは、史料①以下九箇条文の『令集解』にみえる喪葬に関する時間的な段階について記述がある条文の整理を行なった表(4)からでは、「死日（死之日）」は別としても、「発喪」や「葬日」、「改葬」について、それらをいつ行うかについては、令規定の中では全く定められていないと捉えることが出来ることであると考える。つまり、律令国家が令規定として示した原則にあつては、喪葬を営む上での日程について、何ら規定されていないと考えることができるのである。

「発喪」や「葬日」、「改葬」をいつ行うかの記載が見えるのは、喪葬令親王一品条の「発喪三日」という本文にみえる法家の解釈のみである、ということができると思う。喪葬令親王一品条にみえる「発喪三日」に対する法家は、義解・跡説・穴説であるが、義解には「発喪」が「葬日」を基準にして行なうことが記されている。跡説には「発喪三日。謂未葬前扱日。而在家三日挙哀。不必始死之日也。」

とみえ、「発喪」が「未葬」の日を拭んで三日間行なうものであり、必ずしも「死之日」から始めるものではないと記されている。穴説は、太政大臣に支給される「発喪五日」についての解釈であると考えることができ、**「発喪五日。不必死始五日也、別定耳。」**と記されている。**「発喪」**が必ずしも**「死」**から始めるものではないことは、**「跡説」と共通している**と考えることができると思われるが、ここで注意しなければならぬのは、穴説には**「別定」と記されていることである**。この**「別定」とみえることから、何らかの規定が存在したと考えることはできるが、現在ではそれを**知ることができず、また令の本文、もしくは**喪葬令親王一品条では規定されていないことは明らかである**と考える。

このように**「発喪」をいつ行なうかについて相違がみられ、そのために義解・跡説・穴説の法家の論争がある**と思われるが、ここで確認したように、**義解においては「葬日」が基準とされている**。しかし、**「葬日」をいつ行なうかが明確に規定されていない以上、「発喪」をいつ行なうかも規定されていないと考えることができるのである**。またここで指摘したように、**「発喪」について跡説においては全く不明であり、穴説でもこの喪葬令親王一品条には規定されていないと考えることができるので、「発喪」や「葬日」**

「改葬」について、それをいつ行なうかの解釈が唯一みえる「発喪」についても明確な規定は存在しないと考えることができるのである。つまり、**死亡日と密接に関連すると捉えることが出来る「死日（死之日）」は当然として、「発喪」「葬日」「改葬」等の日程の決定に関しても、原則的には令によって強制されることがないと考えることができるのである**。したがって**喪葬を営む上では、最も重要な要素であるとも考えることができる日程の決定に関して、国家の関与をうけることがないことが明らかになると考える**。

以上、**『令集解』にみられた喪葬の段階の考察を通じて概観してきたように、律令国家はその原則ともいえる律令の規定によって、喪葬を「喪」と「葬」の二つの異なった段階が存在すると認識し、その中で時間的な段階、すなわち喪葬の手順ともいえる段階が「死日（死之日）」「発喪」「葬日」「改葬」として認識されていたことを確認することができた**と考える。さらに、この喪葬における時間的な段階に注目すると、各段階おける日程の決定に関しては、**律令国家は関与することが出来なかったと考えることができるのである**。

喪葬の段階を**「喪」と「葬」の段階にわけることができることから、律令国家が既存（豪族等）の喪葬を収公するためには、この「喪」と「葬」の両方の掌握が必要となる**

と考えることができる。このことを明らかにするためには、令制段階において律令国家と各喪葬集団との関係において、喪葬が実際にはどのように営まれたのか、つまり前節において養老喪葬令から確認した、『人』の派遣や『物』の支給」という律令国家が規定した既存の喪葬への関与の原則によって、律令国家が各喪葬集団が営んでいたのかを収公することができたかどうかを確認することが不可欠であると考ええる。しかしここでまず確認しなければならないのは、令制以前の各喪葬集団がどのような人々によって構成されていたかであると考ええる。

つまり律令国家によって、「喪」と「葬」という異なった段階に分類することができると認識されていたと考えることができ、さらに「死日（死之日）」「発喪」「葬日」「改葬」と時間的な、そして手順としての段階として認識されている喪葬が、令制以前すなわち律令国家の以前の段階においては、どのように営まれていたのかを確認する必要があると考える。そこで以下、律令国家以前の段階、すなわち七世紀以前の喪葬について、死亡した人物とどのような関係にある人々によって喪葬が営まれたのかに注目し考察を進めてみたい。

三、『風土記』にみえる七世紀以前の喪葬

本節以下、七世紀以前の喪葬を、その営んだ人々に注目しながら考察を進めていくわけであるが、まず始めに、『風土記』の喪葬記事をいわゆる「五風土記」に見える墓の記事を中心に考えてみたい。これらのうち『播磨国風土記』『肥前国風土記』のなかの九条文に、「墓」に関連するの記事をみることができ、そのなかで喪葬を行なう主体がだれであったかを確認し、喪葬の主権者の所在を確認していくとの見地から、『播磨国風土記』賀古郡の柵墓の条、『播磨国風土記』飭磨郡安相里条、『播磨国風土記』揖保郡日下部里条、『肥前国風土記』松浦郡条の四箇条文の検討を行ってみたい。

結論から先に述べれば、ここにあげた四箇条文は、出身地、死亡地、墓の場所等に注目してみると、死亡した場所と出身地が異なっているが、「喪」と「葬」の両方がそれぞれ死亡者（斃卒者）の本来の属していた集団によって行なわれていると捉えることができるのである。

以下これらの条文について論を進めていくが、まず始めに『播磨国風土記』賀古郡の柵墓の条の記載について考えてみたい。本条は、大帯日子命すなわち景行天皇が印南の別嬢をつまどいし、皇后にしたという著名な伝承であるが、

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

その中で、褶墓の地名起源譚の部分に、喪葬権の所在を考える上で重要な記載がされている。その褶墓の名称の起源を記載してある部分のみを抜粋したのが、次にあげる史料③である。

史料③『播磨国風土記』賀古郡の褶墓の条

（前略）又遷於城宮、仍始成昏也。以後別嬢掃床仕奉、出雲臣比須良比売給於息長命、墓有賀古駅西、有年別嬢薨於此宮、即作墓於日岡、而葬之。挙其尸、度印南川之時、大飄自川下、来纏入其尸於川中、求而不得、但得匣與、褶即以此二物葬於其墓、故号褶墓。於是天皇戀悲誓云、不食此川之物、由此其川年魚不進御贄、後得御病、勅云、葉者也。即造宮於賀古松原、而遷、或人於此堀出冷水、故曰松原御井。

史料③には、印南の別嬢に供奉していた息長命の墓についての記載をみることもできるが、ここで注目したいのは、別嬢の薨去後に、墓に葬るに際して「尸」が、「印南川」を渡ることである。

史料③の内容を具体的にみていくと、次のようになる。

印南の別嬢は、「此宮」と記載されている「城宮」で薨去したと考えることができるが、その薨去に際して、「日岡」に墓が造営されたことが記されている。この「日岡」に造営された墓に遺骸を埋葬するために、別嬢の「尸」は印南川を渡る。しかし「大飄」が川下から吹き、尸を川の中に落としてしまう。その尸を求めたが、得ることができず、匣と褶を墓に葬ったことがみえ、そこでこの墓を「褶墓」と号する、という内容が記されている。

以上のような内容の史料であるが、ここで注目したいのは、印南別嬢の出自の土地、死亡地、褶墓、印南川、これらの位置関係である。現在の加古川とされる印南川は、印南郡と賀古郡の境界にあたる川であり、その右岸が印南郡、左岸が賀古郡に比定されている。別嬢が薨去した「此宮」と記載されている「城宮」は賀古郡に所在すると考えられている。したがって、別嬢は賀古郡で薨去したと考えることができるのである。

先に指摘したように史料③の内容から、「日岡」に造営した墓が、後に、「褶墓」と呼称されることが知れるので、「日岡」の墓の位置を考える場合、「褶墓」の位置を考えればよいことになる。「褶墓」は、印南川の左岸の賀古郡の位置に比定され、現在陵墓参考地として保存されている。

したがって、印南別嬢を埋葬すべく造営された「日岡」の墓の所在地も、賀古郡に所在することになるのである。

つまり、印南別嬢の薨去とその埋葬すべき墓は、双方ともに賀古郡に所在していたことが明らかとなる。したがって、別嬢が薨去した後、喪葬を行なうてすぐに埋葬するのであれば、印南郡と賀古郡の境界である「印南川」を渡る必要はないことになる。しかし、史料③の記載されている内容によれば、別嬢の「尸」は、印南川を渡って、賀古郡の「日岡」の墓に埋葬しようとしていることが知れるのである。したがって別嬢の「尸」が、印南川を渡って、賀古郡の「日岡」に埋葬されるためには、それ以前の段階までは印南郡になければならないことになるのである。

先に検討した喪葬における「喪」と「葬」の段階を考え併せると、別嬢の「尸」が印南川を渡るのは、「葬」の段階であると考えることができると思われる。ここまで述べてきた史料③の内容を矛盾なく理解するためには、別嬢の「尸」は、出自の地である印南郡にいったん戻り、「葬」するため、印南川を渡って、賀古郡に戻ってきたと考える以外の解釈は成り立ち得ないことになると思われる。したがって、喪葬が先に見たように「喪」から「葬」の手順で行われるのであれば、別嬢の「喪」は、その出自の地である印南郡で行なわれていることになると考える。

史苑（第五七卷一号）

「葬」の段階については、史料③に記載がないので推測の域を越えることはできないが、別嬢の「尸」を運んだのが、印南郡の人々であるとすれば、別嬢の喪葬は「喪」・「葬」とともに、その出身地である印南郡の人々が行っていると考えることができるのである。史料③が地名起源譚として『風土記』に所載されていることを否定するつもりは毛頭ないが、その地名起源譚の形成の背景に、本来帰属していた集団が喪葬を担当すべきであるという認識が存在したと考えることは可能なのではないだろうか。

次にあげる史料④『播磨国風土記』魴磨郡安相里条においても、喪葬を担当したのが出自に関わる集団であることを推測することができる。

史料④『播磨国風土記』魴磨郡安相里条

安相里^{長歌} 土中々 右 所^三以称^二安相里者 品太天

皇 從^二但馬^一 巡行之時 緣^レ道不^レ撤^二御冠^一 故号^二

陰山前^二仍 国造豊忍別命 被^レ剌^レ名 爾時 但馬国

造阿胡尼命申給 依^レ此救^レ罪 即奉^二塩代田井千代有

名 塩代田佃但馬国朝来人 到来来居^二於此處^一 故

号^二安相里^一 ^{本名沙部云 後里名依改}

号^二安相里^一 ^{字^二三注^一 為安相里}

本文 阿胡尼命 娶^二英保村女^一 卒^二於此村^一 遂造^レ

墓葬以後 正骨運持去之 云爾

史料④は、但馬国造と記されている阿胡尼命の卒去に関する記載であるが、遺骸の移動という点では、史料③と同様の共通性が見られる。阿胡尼命を但馬国造とするこの問題が指摘もされ、史料自体の真偽が問題とされてはいるが、ここでは史料④の記載に従って、そこに記載されている喪葬を考えてみたい。¹³⁾

史料④には阿胡尼命が、英保村の娘を娶って、英保村で卒去したことがみえる。墓を造って葬ったが、後に「正骨運持去之」として、「正骨」を運んだことがわかる。日本思想大系『風土記』の当該部分の頭註には、「本拠の但馬国に持ち帰った」とあり、また瀧音能之氏も同様の見解を取られているが、史料④の記載から、但馬国に持ち帰ったことを知ることはできないと考える。¹⁴⁾ 瀧音氏は、阿胡尼命が他国で卒去し、「本拠の但馬国に持ち帰った」ことを根拠に、次に検討する史料⑤『播磨国風土記』揖保郡早部里条と史料④を比較し、史料⑤を「遺骨が自国へ移されるのはあたりまえのようにも思われるが、そうでない場合もある」例としてあげられるが、史料④には、阿胡尼命の「正骨」を運んだ場所に関しては全く記載されていないのである。したがって、ここで問題にしなければならぬのは、阿胡尼命の遺骸が何処へ運ばれたかということよりも、誰が運んだかということなのではないだろうか。

ここで考え併せなければならないのは、阿胡尼命が卒去した場所が英保村であるならば、『播磨国風土記』飾磨郡には英保里に関する記載が所載されていることであると考ええる。したがって、阿胡尼命が卒去した場所が問題となるのであれば、史料④の飾磨郡安相里ではなく、英保里条に記載されるべきなのではないだろうか。つまり、実際に阿胡尼命の卒去記事が記載されているのが、飾磨郡安相里条のすぐ後であることを考慮に入れる必要があると考える。

そこで注目すべきは、安相里の地名起源譚であると考ええる。安相里の名称は、「塩代田佃但馬国朝来入 到来居於此處」とあり、塩代の耕作者を但馬国朝来里から移住させたことに基づくことを知ることができる。このことから、阿胡尼命の本貫地と考えることができる但馬国の人々が、英保里と同じ郡である飾磨郡の朝来里に居住していたことが知れるのである。したがって、阿胡尼命の卒去記事の記載位置をも考えあわせると、飾磨郡の安相里に居住している但馬国朝来里から移住した人々が、阿胡尼命の「正骨」を運び去ったと考えた方が自然なのではないだろうか。

すなわち、「正骨」、阿胡尼命の遺骸を、その本貫地の人々である但馬国の人々が持ち運んだと考え、喪葬における本来属していた集団の人々が持つ役割をさらに重要視する必要があると考える。

このことは、次にあげる史料⑤『播磨国風土記』揖保郡早部里条によってより一層明確になるものであると考える。

史料⑤『播磨国風土記』揖保郡早部里

早部里内入姓 爲各土中々

立野 所_三以号_三立野_二者 昔 土師弩美宿禰 往_三来_二於
出雲国_二宿_三於早部野_一 乃得_レ病死 爾時 出雲国人来
到_二連立人衆_一運伝 上_三川礫_二作_一墓山_一 故号_三立野_二
即号_三其墓屋_一 為_二出雲墓屋_一

(傍線、記号は引用者が付す)

史料⑤は、土師弩美宿禰、すなわち野見宿禰が、その出自の地と考えることができる出雲国との「往来」の途中、播磨国揖保郡早部里において「病死」したことが記されている。史料⑤で注目すべきは、病死した野見宿禰の喪葬の営まれ方であると考ええる。すなわち、喪葬を行なうにあたって、「出雲国人来到」として、野見宿禰の出自の地の人々が、喪葬を行なっていると考えることができることである。この「来到」した「出雲国人」は、「連立人衆運伝 上川礫作墓山」を行ない、野見宿禰を播磨国揖保郡早部里に葬している。

従来、「連立人衆運伝 上川礫作墓山」については、先

史苑(第五七卷一号)

にあげた瀧音能之氏の論によっても「こぞって『川の礫をあげて』墓を造った」との解釈がなされている。⁵⁾しかし、「連立人衆運伝」の部分には主語がなく、次にみえる「上川礫作墓山」とのつながりで解釈しなければならぬ必然性はないと考えることができる。「連立人衆運伝」の「運伝」を、野見宿禰であると考えすることはできないであろうか。

「上川礫作墓山」の後の部分に、「号」が二つあることにも注目すべきであると考ええる。最初の「号①」は「号立野」、二つ目の「号②」は、「号其墓屋 為出雲墓屋」という内容である。「号①」は、「連立人衆運伝」の内容に対応し、「号②」は、「上川礫作墓山」に対応していることがわかる。このように考えると、野見宿禰の喪葬については、「連立人衆運伝」と「上川礫作墓山」が二つの内容を有しているという解釈が成り立つと考える。

すなわち、野見宿禰の出自の地の出雲国の人々は、「来到」して、喪葬に関する「連立人衆運伝」と「上川礫作墓山」という二つを行なったと考えることができるのである。このように解することが許されるのであれば、出雲国の人々は、喪葬を担当するために「来到」し、「連立人衆運伝」を野見宿禰の遺骸を運ぶと解釈し、「上川礫作墓山」がその埋葬を行なうための造墓を行なったと解することができる、

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

「喪」と「葬」の双方を行なったと解釈することが可能になると考える。「連立人衆運伝」を、造墓のために礫を運ぶのではなく、「喪」を行なうために、その場まで野見宿禰の遺骸を運んだという解釈は十分成り立ち得ると考える。このような解釈が成り立つとすれば、先に見た史料③・

④と同様に、七世紀以前には、本来属していた集団によって喪葬が行なわれるという認識が存在し、そのような喪葬の営まれ形が、日本古代における喪葬の本来のあり方として存在したのではないか、という推測が成り立つのである。最後に、次にあげる史料⑥『肥前国風土記』松浦郡の摺振峯条を考えてみたい。

史料⑥『肥前国風土記』松浦郡条

摺振峯 在部東一峰處
名曰摺振峯

大伴狹手彦連 発船渡任那之時 弟日姫子登此
用摺振招因名摺振峯 然弟日姫子 與狹手彦連
相分 經五日之後有_レ人每夜来 與_レ婦共寝 至曉早
婦 容止形貌似_レ狹手彦 婦抱_レ其恠 不得_レ忍默
窮用_レ統麻 繫_レ其人欄 随_レ麻尋往 到此峯頭之
沼辺 有_レ寢蛇 身人而沈_レ沼底 頭蛇而臥_レ沼脣
忽化_レ為人 即語云

志怒波羅能 意登比賣能古素 佐比登由母 為_レ柵弓

牟志 太夜 伊幣爾久太牟也
于時 弟日姫子之從女 走告_レ親族 々々發_レ衆 昇
而看_レ之蛇并_レ弟日姫子 竝亡_レ不_レ存 於_レ茲 見_レ其沼底
但有_レ入_レ屍 各謂_レ弟日女子之骨 即就_レ此峯南 造_レ
墓治置 其墓見在賀周里 在郡西北

史料⑥では、大伴狹手彦が任那に発船したとき、弟日姫子が摺を振ったことから、「摺振峯」となづけられた地名起源譚と、弟日姫子の喪葬に関する内容が記載されているが、ここで注目したいのは、弟日姫子の喪葬に関与したと考えることができる人々の表記である。

弟日姫子の従女が走り告げたのは、「走告親族」と記載されるように、「親族」と記載されている。その後には、「々々發衆」とみえ、沼の底にある「人屍」について「各謂弟日姫子之骨」と記載されていることから、「各」が「親族」と「衆」であると考えることができる。したがってそれらの人々が、「即就此峯南 造墓治置」したと考えることができるであろう。

以上のことから史料⑥では、弟日姫子の喪葬を担当したのが、弟日姫子の「親族」とその「衆」であることがわかる。「親族」と「衆」がどのような範囲の人々であるか本条から明確にすることはできないが、史料③・④・⑤の検

討から導いた推測が正しいとすれば、「親族」や「衆」は、弟日姫子が本来属していた集団であるという推測が成り立ち、その集団を「親族」や「衆」と表記されていると考えることができるのではないだろうか。

四、『日本書紀』・『統日本紀』にみえる

七世紀以前の喪葬

ここまで『風土記』に記載された史料③から⑥の検討通じ、本来属していた集団が喪葬を行なったのではないかという推測で行なってみた。『風土記』の本来的な性格は地誌であり、そこに記載された内容がどこまで歴史事実に基づいているかについては、十分な検討を要することはいうまでもないと考える。そのような史料上の性格を考えたとしても、喪葬を営むのが死亡者の本来帰属する集団であるという認識のもとに史料が形作られたと考えることは十分に可能であると考ええる。

しかし、死亡者の本来帰属する集団が喪葬を行ったと考えることができる事例は、ここにあげた『風土記』の史料③から⑥だけでなく、『日本書紀』や『統日本紀』にもみることができる。

『日本書紀』には、次にあげる敏達十二年是歳条の日羅

史苑（第五七卷一号）

の喪葬に際して、日羅の「眷族」が喪葬をおこなっていると考えることができる内容の記述が所載されている。敏達十二年是歳条は長文にわたるので、日羅の喪葬に関連すると考えることができる部分をあげると、次の史料⑦のようになる。

史料⑦『日本書紀』敏達十二年是歳条

（前略）於是日羅自桑市村遷難波館。德爾等晝夜相計將欲殺。時日羅身光有如火焰。由是德爾等恐而不殺。遂於十二月晦候失光殺。日羅更蘇生曰。此是我駟使奴等所為非新羅也。言畢而死。屬是時有新羅使故云爾也。天皇詔贊子大連糠手子連令收葬於小郡西畔丘前。以其妻子。水手等居于石川。於是大伴糠手子連議曰。聚居一坵恐生其戀。乃以妻子居于石川百濟村。水手等居于石川大伴村。收縛德爾等置於下百濟阿田村。遺數大夫推問其事。德爾等伏罪言。信是恩率。參官教使為也。僕等為入之下不敢違矣。由是下獄復命於朝廷。乃遣使於葦北。悉召日羅眷族。賜德爾等任情決罪。是時葦北君等受而皆殺投弥売嶋。彌賣嶋養姫嶋也。以日羅移葬於葦北。於後海畔者言。恩率之船被風没海。參官之船漂泊津嶋。乃始得帰。

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

史料⑦は難波の館において、徳爾等によって日羅が殺される内容のものであるが、ここでは日羅の埋葬に注目したい。徳爾等によって、殺された日羅は、天皇の詔によって、贄子大連と糠手子連が「収葬於小郡西畔前」している。徳爾等の罪を償わせるために「遣使於葦北。悉召日羅眷族。賜徳爾等。」として、日羅を殺した徳爾等の処罰をその「眷族」に自由にさせているが、問題としたいのは、その後に記載された、「悉召日羅眷族」が、日羅の遺骸を葦北に移葬することである。

日羅の遺骸が葦北という日羅の本貫地に戻されるという点についても注目することはできるが、日羅の「眷族」が来ることによって、遺骸が移葬されていることに特に注意を要すると考える。すなわち日羅の遺骸は天皇の詔によって、贄子大連と糠手子連によって「収葬」されたにも関わらず、「眷族」によって、日羅の遺骸は葦北に持ち帰られてしまうのである。このことは、遺骸をどのように扱うか、すなわち喪葬を誰が行うかの権利は、「眷族」にあることの証明になると考える。

つまり、日羅が本来属していた集団と考えることができる「日羅眷族」によって、その喪葬が行なわれることによって初めて、日羅の喪葬は完結するのであって、このことから、死亡者が本来帰属する集団、その人々に喪葬を行なう

権利があったことが明らかになると考えることができるのである。

『続日本紀』では、文武四年三月己未条に所載された道照の物化記事、死亡した記事の中に、喪葬を営む人々を考える上で、注目に値する記述をみるができる。文武四年三月己未条は、道照の物化記事にはじまり、一般に薨卒伝といわれる経歴を長文にわたって記しているの、その中から、本稿の考察の中心である喪葬を営んだ人々を考える上で重要であると考えられる部分を抜粋して提示すると、次にあげる史料⑧のようになる。

史料⑧『続日本紀』文武四年三月己未条

（前略）時年七十有二。弟子等奉遺教。火葬於栗原。天下火葬從此而始也。世伝云。火葬畢。親族与弟子相争。欲取和上骨斂之。飄風忽起。吹颺灰骨。終不知其處。時人異焉。後遷都平城也。和尚弟及弟子等奏聞。徙建禪院於新京。今平城右京禪院是也。此院多有經論。書迹楷好。並木錯誤。皆和上之所將來者也。

史料⑧は、文献史料上、最初の仏教的火葬が行なわれた史料として著名な条文であるが、火葬が終わった後の「世

伝云」の部分に、「親族」と「弟子」のどちらが、道照の骨を治めるかで争っているとの記載がみえる。「親族」とは道照が出家以前に属していた集団の人々を指し、「弟子」とは出家後に属した集団に関係する人々であるということが出来る。史料⑧ではその両者が、道照の火葬骨の所有権を主張して争っていることが記されている、と考えることができるのである。このような「親族」と「弟子」との争いは、本来属していた集団に喪葬権があるにも関わらず、「弟子」が喪葬権を主張したことによって、起こったと考えることができるのではないだろうか。道照が僧であるということ、他の条文とは異なって、その骨に特別な意味があることを考慮に入れる必要があると思われるが、誰が喪葬を行なうか、ということが重要な問題であったことを知る上で重要な条文であると考える。

以上二節にわたって検討してきたように、七世紀以前の段階にあっては、喪葬を行なうのは、死亡した人物が本来属していた集団であり、そこに属する人々が、喪葬を執り行う権利、喪葬権を所有していたものであると考える。前節で検討した『風土記』や、本節で検討してきた『日本書紀』・『続日本紀』に記された七世紀以前の喪葬に関する条文は、全てが史実に基づいているとはいいたいと思う。さらに十分な検討を各条文に関して行なったということは

できず、今後さらに十分な検討が必要であると思われる。しかし少なくとも、令制以前の段階にあっては、喪葬を営む権利、すなわち喪葬権が本来は各喪葬集団に属していた可能性を指摘することはできないかと考える。

結びにかえて

最後に、ここまで検討してきたことをまとめてみたいと思う。まず初めに、喪葬を営む上での権利と律令国家の喪葬への関与の原則について、比較を試みてみた。その比較から既存（豪族等）の喪葬にどのような影響を与えたかを考えた場合、律令国家がその原則として規定した律令によっては、すなわち養老喪葬令の規定からでは、その喪葬を全面的には収公することはできなかったのではないかと、との推測を行なった。そのことを一層明確にするために律令国家が喪葬に対してどのような認識を持つかの確認が必要があると考え、律令国家の原則の中にみえる喪葬における時間的な段階について考察し、喪葬を執行する段階として「喪」と「葬」に分けることができる、との指摘を行なった。さらに喪葬における時間的な段階を律令国家がどのように認識していたかをさらに明確にするためには、その原則にみえる、喪葬における時間的な段階、手順における段

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

階を表わす言葉を抽出することが必要であると考え、『令集解』の記載から、喪葬の手順ともいえる段階が、「死日（死之日）」「発喪」「葬日」「改葬」として認識されていたことを指摘した。その上で、この喪葬における時間的な段階に注目すると、各段階における日程の決定に関しては、律令国家は関与することが出来なかったと考えることができるとの結論を導いた。

喪葬の段階を「喪」と「葬」の段階にわけることができることから、律令国家が既存（豪族等）の喪葬を収公するためには、この「喪」と「葬」の両方の掌握が必要となると思われる。律令国家と各喪葬集団との関係において、律令国家段階において実際にはどのように喪葬が営まれていたかを確認することが不可欠であると考えが、その前に令制以前の各喪葬集団の構成を明らかにする必要があると考える。すなわち各喪葬集団によって喪葬が営まれていたと考えることができる律令国家以前の段階、すなわち七世紀以前の喪葬が、死亡した人物とどのような関係にある人々によって喪葬集団が構成され、どのように喪葬が営まれたのかについて明確にする必要があると考えることができる。このような見地から『風土記』、『日本書紀』・『続日本紀』にみえる七世紀以前の喪葬の検討をおこなった。その考察を通じて、七世紀以前の段階にあっては、喪葬を行なうのは、

死亡した人物が本来属していた集団であるとの結論を導いた。

したがって、ここまでの考察によって導いた結論から、律令国家はその原則ともいえる令規定によっては、既存の喪葬に関与し、収公することはできなかったと考えることができ、令制下においても喪葬についても、令制以前と同様に、死亡した人物が本来属していた集団の人々によって構成される喪葬集団によって、喪葬が営まれていたと考えることができると思われる。

既存の喪葬が、律令国家段階にあっては、それ以前と同じように営まれていることは何を意味するのであろうか。国家と豪族の関係について論じられた長山泰孝氏は、律令国家段階とそれ以前の「大和国家」の段階における、国家と豪族の関係の相違について、次のような見解を示されている。長山氏は、「日本の古代国家は、大和国家の段階から律令国家の段階まで一貫して豪族」によって構成されていたとされ、律令国家の段階になって初めて「豪族層が全面的に国家に組み込まれた」とされている。長山氏の指摘から、国家と豪族の関係を明らかにすることが日本の古代社会を明らかにする上で非常に重要な課題であることを知ることができるのであるが、長山氏の「全面的」という言葉から、豪族は、律令国家の段階にあっては、全ての面で

国家に組み込まれたとの印象を強く受ける。すなわち律令国家の成立によって、それ以前には豪族たちが持っていた権利の全てが、国家によって収公されたという印象を強く受けるのである。しかし、もし令制以前の喪葬を営んでいた各喪葬集団が豪族であるということが認められるとするならば、ここまでの考察を通じてきたように、少なくとも喪葬においては、令制以前に喪葬を営んでいた各喪葬集団＝豪族に、喪葬を営む上での権利が残されたと考えることができると思う。つまり律令国家が、本稿で考察したように、その原則たる喪葬令によって、既存の喪葬に関与し、収公することができなかったとすれば、長山氏がいわれる「全面的」という表現は適切なものではないということになる、と考えることができるのではないだろうか。このように考えると国家と豪族の関係、すなわち律令国家と喪葬集団の関係を考えた場合には、大宝令の施行による律令国家の形成過程における確立ともいえる大きな社会的な変化、さまざまな面で画期と呼べるような変化が、少なくとも喪葬という面では、画期になり得ないと考えることができると思われるのである。

本稿で行なった考察を、律令国家と豪族、喪葬集団との関係を考える上で、以上のように捉えることができるかと考えるのはあるが、さまざまな面で推論に推論を重ねたこ

とは否めないと思われる。本稿での指摘をさらに明確にするためには、多くの課題が残されていると考える。喪葬の権利としてあげた要素のうち十分な検討を行ったのは「日程の決定権」に関するもののみであることや、喪葬段階における「喪」と「葬」の具体的な意味の相違、「死日（死之日）」「発喪」「葬日」「改葬」の内実的な相違など、今後に残された課題は数え上げれば枚挙にいとまがないと思われる。

特に、律令国家は実際には、その原則によって喪葬における「喪」と「葬」の両方を掌握することができたのかどうかという点については、全く私見を提示することができなかった。養老喪葬令の記載の検討を通じて、律令国家が規定した既存の喪葬への関与の原則が、『人』の派遣や『物』の支給であるということができるとは、既に指摘した。その中で『人』の派遣については、『続日本紀』では官人の死亡記事、いわゆる薨卒記事に律令国家からさまざまな遣使の記述をみることができ、それらの検討を通じて、この問題を明らかにすることができると考えるが、既に指定された紙面を大幅に越えているので、ここでは残された多くの課題とともに、この点の考察についても後考に委ね、まずは本稿での考察について諸氏の御叱正をまちたいと思う。

註

(1) 以下本稿では、巻の当初の令の編目の部分を指して、「首書」という表現を用いる。

(2) 表(4)に示したように、假寧令給喪假条の跡説には、「喪日」について「喪日。謂死日也。」とみえる。それに対して喪葬令親王一品条の「発喪三日」にみえる跡説には、「死日」ではなく、「死之日」と記載されている。跡説が「死日」と「死之日」を使い分けていると考えることができることから、その表わす内容が全く同一のものではなく、異なった時間的な段階を示していると考えられると思われる。しかし本稿では、『令集解』にみえる本文や法家の解釈に見える時間的な喪葬段階に関する用語の確認に主眼をおいたものであり、「死日」と「死之日」の双方が死亡日と密接な関係があると思われる表記であることから、「死日（死之日）」と記し、「死日」と「死之日」の厳密な相違について、どちらが死亡した日であるかなどの具体的な検討は、今後の課題としたい。また、同様の見地から、ここに記載されている「発喪」「葬日」「改葬」などの用語の持つ具体的な意味や内容の検討についても、今後の課題としたい。

(3) 日本思想大系『風土記』（岩波書店）三五四頁 補注。

(4) 瀧音能之『風土記にみえる葬制・墓制』（『原始・古代日本の墓制』同成社 一九九一年）。

(5) 瀧音氏、前掲註(4)論文。

(6) 以下、混乱を避けるため本稿では、史料⑤に傍線として付したように、最初の「号」を「号①」、二つ目の「号」を「号②」という表記を用いる。

(7) 長山泰孝「国家と豪族」(『岩波講座』『日本通史』第三卷 古代

2)。

(8) 令制以前の各喪葬集団が、豪族と呼称されるに近いものであるとは思われるが、未だ不明確な部分が多いように思われる。したがって、令制以前の喪葬集団を、明確に豪族と全く同じものであるということができるといえるかどうかについては、今後の課題としたい。

追記

本稿は、立教大学大学院博士課程後期課程提出論文の博士予備論文の第一章第一節の一部に加筆・訂正したものである。

（立教大学非常勤講師）

表 (4) - I

史苑 (第五七卷一號)

	死日 (死之日)	發喪	葬日	改葬
職員令 諸陵司条	〈令釈〉 喪謂在家起哀也		〈令釈〉 葬謂送葬之也	
喪葬令首書	〈義解〉 喪者。死屍称也。 〈令釈〉 死謂喪。 〈跡説〉 死謂之喪。		〈義解〉 葬者。藏也。 〈跡説〉 藏謂之葬。	
假寧令 改葬条				〈本文〉 凡改葬
假寧令 給喪葬条		〈古記説〉 三月服以上並給程。謂 本服三月以上親是。唯 喪所難近。以喪日為 始。 〈穴説〉 喪葬。謂喪假改葬假等 也。孝哀者約喪。		〈古記説〉 給喪葬等假。謂喪假改 葬假是也。 〈穴説〉 喪葬。謂喪假改葬假等 也。孝哀者約喪。
假寧令 給喪葬条	〈本文〉 凡給喪假。以喪日。為 始。 〈義解〉 喪日。猶死日。 〈義解〉 釈无別。 〈古記説一云〉 以喪日。為始。何者。 祇日待時發喪者。依律 科罪故也。 〈跡説〉 喪日。謂死日也。	〈本文〉 凡給喪假。以喪日。為 始。 〈古記説〉 以喪日。為始。謂初發 喪日也。	〈本文〉 凡給喪假。以喪日。為 始。	
	〈本文〉 孝哀者。以聞喪為始。 〈義解〉 凡給聞喪假者。不可追 計死日。 〈朱説〉 給喪假。以喪日為始者 以喪日不可為始者。此 説違令釈問答耳。	〈本文〉 孝哀者。以聞喪為始。 〈令釈〉 孝哀聞喪也。謂聞喪給 假者。以聞時為始。不 可以死日。為始耳。 〈古記説〉 猶隨聞時孝哀。故以聞 時為給假也。 〈跡説〉 凡預葬給喪假。葬訖後 聞給孝哀假。	〈本文〉 孝哀者。以聞喪為始。 〈義解〉 其聞喪之人。應往会葬 者。給喪葬假。 〈跡説〉 應往会給葬假。	

表 (4)－Ⅱ

律令国家の喪葬と既存の喪葬（石井）

	死日(死之日)	發喪	葬日	改葬
喪葬令服錫紵条	<p>〈本文〉 凡天皇。為本服二等以上。親喪。服錫紵。</p> <p>〈朱説〉 凡服死日即始可服也。於此令發喪日。亦死日即可發耳。不見別文者。</p>	<p>〈穴説〉 凡給喪假。以喪日為始。拳哀以聞喪為始。</p> <p>〈朱説〉 先云。物云。別喪有發喪日。此日可服者。未明何。額亦云。別可有發喪日。此日可服。</p> <p>又四位以下。无發喪日。親等者見葬日可服者何。</p>		
喪葬令京官三位条	<p>〈本文〉 遣使弔</p>	<p>〈穴説〉 並一拳哀者。案之。使奏聞之日。此聞喪日也。故知。當日拳哀。即初服錫紵。及不視事。而當時師云。下條發喪日。内停見事。及服錫紵者。是会本令拳哀之義。少難。抑得此意三條可勘会。</p>		
喪葬令百官在職条		<p>〈本文〉 凡百官在職薨卒。当司分番会喪。</p> <p>〈朱説〉 問。会喪者。只發喪日之限歟。若至喪葬事了可会哉。額云。發喪限歟。然不明何。</p> <p>〈本文〉 及太政大臣。散一位。治部大輔監護喪事。</p> <p>〈朱説〉 凡監護喪事者。至喪所而事記監護者。</p>		
喪葬令親王一品条		<p>〈本文〉 發喪三日</p> <p>〈義解〉 ①發喪。猶拳哀也。先葬二日始拳哀。乃至葬日以終。</p> <p>②下文云。發喪五日。亦以葬日為終也。即鼓角幡盾等。凶儀哀容。皆悉周舉。然後與諸司發喪也。</p> <p>〈跡説〉 發喪三日。謂未葬前折日。而在家三日拳哀。不必始死之日也。</p> <p>〈穴説〉 發喪五日。不必自死始五日也。別定耳。</p>		